

風の末裔シリーズ・4th シーズンの9

～巢立ちの雛鳥～



©西風そら

<http://niskaze.sakura.ne.jp>

蒼の里の霜の朝。

馬繋ぎ場に集まった人々の吐く息が、白く辺りを埋めている。輪の中心には旅装のシドとノラ。

ノスリが皆を代表して進み出た。

「堅き眷族の絆で結ばれし西風の友人、貴殿らの友情に、我等、久遠くおんの感謝を」

仰々しく唱えてから、ちっちゃい声で言う。

「アリガトな…、ホンット助かった！」

二人の青年は、ノスリ、ホルズ、ナーガと、順に握手した。

「寂しくなるな。君達と暮らすの、楽しかった。家族みたいで」  
食住共にしていたナーガは、両手でしっかりと二人の手を握って別れを惜しんだ。

「春になったら戻って来ますよ。そしたらまた、僕達の兄になって下さ」

泣き虫次期長は、その言葉だけで既にウルウル来ている。

西風の妖精は寒さに物凄く弱い。冬の間は砂漠へ戻らなければならぬ。それにしても、ルウとシンリイがあまりに仲良くなったので、出立が延び延びになっていたのだ。

「ルウは？」

「朝早くシンリイと手を繋いで放牧地の方へ行きました。色々

と語り合っている」

「そう…、本当にルウには感謝しているよ。シンリイの表情が見違える程豊かになった」

「それは…、その言葉は、そっくりそのままお返ししますよ」

ルウの子供達が賑やかに見送りに来ている。西風の里でずっとルウは子供達の中心にいたが、向こうを出て来る時に、見送りまでしてくれた子はいなかった。蒼の里はルウに確実に何かを与えてくれている。

「来春には、シンリイも草の馬で飛んでいるさ」

同じ年の子供達は既にそれぞれの馬を当てがわれ、飛行訓練に入っているが、シンリイはまだだ。実を言うと、シド達が発を延ばしていたのは、密かにシンリイの騎馬姿を見たい…という思いもあったのだが、叶わなかった。それがちよっぴり残念だ。

「僕達が最初に会った金鈴花の頃は、落っこちて来たばかりの牡丹雪みたいなの、はかなげな子供でした。それから比べたら背も伸びて、見違えるようです。立派な騎馬姿は、次来た時のお楽しみに取っておきます」

子供達が歓声を上げ、ルウがシンリイの手を引いて、メインストリートを駆けて来た。

「待たせてコメン」

「構いませんよ。やあ、シンリィ」

ルウはノスリとホルズにきっちり挨拶をし、次にナーガに向いた。シドとソラは春に戻るが、ルウは定かでない。両親ともかく、西風の老人達は、ルウが他所に長居するのを良く思っていない……ってのを、ナーガは最近知った。

「ナーガ、一杯世話になった。ありがと」

「こちらこそ、ルウには楽しませて貰った」

「最後にいっこ、お願いがあるんだ」

「何だい？」

「シンリィを連れて行きたい」

.....

霜に覆われたハイマツの丘。

水色の妖精は一人、寒風に髪を揺らしていた。

「痛……」

薬指の切り傷が風に沁みる。さっき、急いで彫り物をしたので、小刀で指先を刺してしまった。

ヒリヒリするのはその傷のせいだけではない。今しがたまで

「ここには、ルウシエルとシンリィがいた。」

「シンリィがお師さんを頼っちゃまって、雛鳥から抜け出せない

のなら、私がシンリィをお師さんから引き離してやる」

「どうやって？」

「私は今日、西風の里に帰る。シンリィも連れてく」

「……………」

「連れてくぞ、いいなー」

水色の妖精は、口をキュッと結ぶオレンジの瞳の娘と羽根の子供を、マジマジと見つめた。

まったく、子供って、何て早さで駆け抜けて行くんだ…。

「好きにするがいいさ……、シンリィ……」

.....

西風の娘の突然の宣言に、談笑していたノスリとホルズが真顔になって振り向いた。子供達も、他の里の者も、え？ って感じで静まり返った。ナーガは脳天を揺すられたような目をしてルウを見下ろしている。

「つ、連れて行きたいって…何で？」

「うん、シンリィが来たいんだ。エノシラにも話した。春になったらシドとソラが連れて帰る。いいだろう？」

「ま、待って下さい！ ルウ様！」

「聞いてませんよー！」

「連れてくったって、犬の仔じゃないんだぞー！」

「先方さんの都合だってあるだろう？」

皆、慌てたが、ナーガは逆に、冬の湖面みたいに静まり返った声で聞いた。

「シンリィが、行きたいって？」

「ああ」

「シンリィ……？」

シンリィはいつものほんだ色の真ん丸な瞳で、ナーガを見上げていた。そして、ルウの手をギュッと握る。

(春までじゃない……)

何だかナーガには分かった。

今、自分の前からいなくなるって事は、自分を必要としなくなった……って事だ……。シンリィは、もっと遠い所に旅立とうとしている。

「……うん……。いいんじゃないかな……。シンリィが、行きたいなら……うん……」

ナーガは声の上すらないように努力しながら、やっと言った。

「ナーガ様?!」

「いいのか? ナーガ?」

「はい、シンリィが行きたいのなら。シド、ソラ、申し訳ないけれど、宜しく頼むよ。追って、モエギ殿に手紙を送るから」

ナーガは自分でも驚く程落ち着いた声で、事務的に言った。そしてその後ずっと、遠くの幻灯機を見ているように見送りの風景を眺めていた。

シンリィは遠に荷造りを済ませており、小さな荷物と共にシドの青毛に収まった。ルウは、蜜柑の苗木と白銀の剣と……子供達の贈り物でパンパンになった鞆と共に粕鹿毛に跨がり、ソラもパロミノの上から皆に最後の会釈をした。

そして、三頭の馬は天空高く舞い上がり、結界を越えて見えなくなった。

「行っちゃいましたね」

「あっけない奴だなあ」

エノシラやノスリ達がまだ空を見上げて立ち話している横を、ナーガはさっさと通り過ぎた。

坂を登って自宅へ向かう。とっとと支度をしなくては。今日の仕事が残っている。自分の日常は変わらない……。

一人ではだだっ広い、昔の大長のパオ。今朝まではシドとソラがいた。生真面目な二人が来た時よりキッチンと片付けて行ったので、余計にガランとしている。

「……」

ふと、真ん中の小卓の上に、何かあるのに気が付いた。シドとソラが置いて行ったのか？ 近寄ったナーガは、思わず飛び退いた。

「こ、これ…!! 何で、これがっ…!!」

そこにあったのは、『あの』人形…。

「砕けたはず…?!」

気持ち悪いモノを感じた。目を含みさめようよく見ると、あの古びた不気味人形ではなかった。同じ作りだが、彫り跡がきれいだ。新しい…物？

「……………」

ナーガは入り口の鏡を取り、そおっと近付いて、人形の前に立てた。果たして、鏡には人形ではないモノが映った。銅色の鏡面に浮かび上がったのは、はまだ色の瞳の羽根の子供。

「…シン…リィ……………」

その小さい唇が開く。

《…ナーガ…》

唄うような、澄んだ声。聞いた事がある…。ああ、そうだ、まるでユーフィに呼ばれているみたいだ…。

《…ナーガ…、ナーガ、ナーガ…》

映し身のシンリィは、ナーガの名を何度も呼んだ。

その呼び声には、言葉にしなくても分かる、色んな想いが添えられている。

ナーガ、ありがと…

ナーガ、だいすき…

ナーガ…、さよなら……

パキンと音がして、人形はまだ砕けた。

\*\*\*

ナーガは立ち上がって、パオを飛び出した。

馬繋ぎ場へ走る。立ち話を終えたノスリとホルズがゆっくり上がって来る所だった。

「よお、ルウの奴、まったくくびくくりさせるよな。どうした？」

「すみません！ すぐ戻ります！」

それだけ言って走り去ろうとするナーガの肩を、でっかい掌が捉えた。

「…ノスリ長？」

「すぐ戻んなくていい。お前が納得行くまで、ちゃんと話してくれ！」

ナーガは目だけでノスリに伝えて、駆けて行った。



「親父…」

「午前中、俺が二人分働きゃあいんだろ？ まあったく、世話の焼ける息子達だ」

ナーガがジェット気流に乗ろうと上昇している時…。フィツと頭に、疑問が浮かんだ。

——今の人形…。誰が作ったんだ？ ——。

次の瞬間、彼の血が教えた。後ろに、誰か、いる？！

全身が総毛立つ。この感じ…。まさか…まさか…。

「カ…カワセミ長…？」

「…ボクは、とおに長じゃない。じき、キミが長だろう？」

聞き覚えのある無表情な声。

しかしナーガは見えない糸に縛られたように動けなかった。

「い、生きていたんですか？ それとも、生きていないモノですか？」

「そんな事も判らないで、次期長を張っているのか？」

ああ、この憎まれ口…。間違はなく、生きたあのヒトだ！

「黒死病は？」

「何とかなったみたいだな」

「い、今まで…」

聞きたい事が山積みだ。しかし、口に出そうとすると、何だ

かどれも薄っぺらく感じられた。とにかく、このヒトが、生きていてくれた…！

「…ナーガ、キミに感謝している…」

少し時間を置いて、後ろの音がボソツと喋った。

「シンリィを、キミに託してよかった」

「まさか…」

ナーガは動けない中で、小さく首を振った。

「僕は、何も出来ませんでした。あの子に言葉を教える事も、里の中で居場所を作ってやる事も…」

「それでもないと思う…」

後ろの声は相変わらず抑揚ないぼそぼそ喋りだったが、穏やかな感じが伝わって来た。

「あの子が樂立ちの雛鳥になれたのは、ナーガのお蔭だ」

「…？？？ まさか…僕は、何も…」

「ボクには欠けたモノ…。顔を上げて未来さきに向く力。あの子を導いたのはキミだ。キミにしか出来なかった…。感謝している…」

不意にナーガの身体の戒めが抜けた。急いで振り向いたが、そこには灰色の冬空が広がるばかりだった…。

「早かったな、シンリイに会えたのか？」

執務室のホルズは、大机の書類から目を上げないで、忙し気に聞いた。

「いえ、会いませんでした」

ホルズは顔を上げた。

「どうして？」

「親鳥から離れて独り立ちしようって子供に、僕が追いつがっちゃ駄目でしょう」

「……………」

ホルズは目を丸くしたが、ほお、まあ、そうだな…と呟いて、書類に目を戻した。

カワセミ長は、生き延びて、里とシンリイを見護ってくれていたんだろう。これからも、きつと…。

ナーガは今日の仕事の書類を手にして外に出た。

下の道を、オウネ婆さんに従ったエノシラが通り、ナーガに気付いて手を振る。どこかでお産があるんだろう。

新しい命は続々生まれている。里の命も永々と紡がれて行く。

く おしまい く

く おまけ・1 く

「シンリイ、お茶入れてくれ」

ホルズは大机で書き物をしながら、口に湯呑みを当てるジェスチャーをした。

「あ…」

そうだった…、羽根の子供はもういない。今朝方、呆気なく西へ旅立ってしまったのだ。

目の前の長椅子では昨日まで、羽根の子供が書類を揃えて穴を開けて綴じる作業を、一心にやっていた。お陰で、乱雑だった書棚はすっきりきれいに片付いている。

「丁度一番下の段までやり終えて行きやがった…あいつ」

言葉のないシンリイの世界には勿論文字もないのだが、ちょっとやって見せれば、同じ形の文字の書類を選び出してまとめる事が出来た。その他にも、お使いやら掃除やら、シンリイは細々と役に立っただし、第一、愛想を必要としない子供は、一緒に居てとても楽だった。

「お前さんが来てくれて、よかったよ…」

もっとも、言葉を解しない貧弱な子供をナーガが連れ帰った時は、子供の血統に期待を寄せていた周囲と同様に、彼もガツカリした。そんな自分を思い出して苦笑いする。



御簾が開いて、ノスリが入って来た。一瞬長椅子に目を向けてから、大机の方へ歩く。親父はどつやら、羽根の子供が長椅子に収まっている風景が好きだったのだ。

「早かったな、親父」

「ああ、若いもんに任せて来た。あいつら、もう俺がいなくても大丈夫だ。次から単独で出していいぞ」

「じゃあ、簡単な仕事から回してやっか」

シドとソラもいなくなって、それなりの体制を整えていかなければならない。

「それからな、この機会にあの話、具体的に考えて行かないか？」

「ナーガの事か？」

この機会とは、シンリィが旅立った機会で、あの話とは、ナーガの『次期長』の『次期』を取っ払う事だ。

寄る辺ない子供が、しっかり先を見て何かを求めて行動出来るまでに成った。ナーガの心の呪縛がちょっとは解消されて、一つの区切りが着いたと見ていいだろう。

「メンタル面がまだ頼りないっちゃ頼りないが…、俺が長を襲名した時だって、もっと心許なかった。まあ三人長って強みはあったが…。その分ナーガには、俺達がフォローしてやりゃいいだろ」

「そしたら親父は『大長』を名乗るか？」

「…それは…」

あのヒトの消息が消えてもつすく六年だ。……だけれど……。

「俺は『ノスリ』でいいよ。気楽だし」

「『ノスリ翁』とかどうだ？」

「勘弁してくれ」

窓から西陽が入る。日が短くなった。

オレンジの柔陽に紛れて、何がふわりと舞い込んだ。

「お…？」

ノスリの受け止めたそれは、去った筈の子供の羽毛だった。

「すみません!!」

窓から、シンリィよりは大分年上の、明るい髪色の子供が覗いた。

「それ、その羽毛、俺のなんです」

「おう、入っていいぞ」

子供はキョロキョロしながら執務室に足を踏み入れ、羽根を受け取った。

「シンリィのか？」

「うん…あ、はい。昨日、あいつに買ったんだ…です。身に付けどこうと思って、エノシラお姉ちゃんに小袋を作って買って、

入れようとしたら飛んじやったの…です」

「うん、そうか」

「おい、坊主！」

ホルズがいきなり大声を出した。

「お前さん、名前は？」

「はい…、シュジュです」

「よし、シュジュ！ 茶、入れてくれ」

「えっ??？」

「大切な物が分かってている。気に入った。シュジュ、お前をシリィの後釜に任命する」

「は？ はあ…」

「自分が小間使いが欲しいだけだろ」

「誰でもいいって訳じゃない。羽根の導きだ、観念しろ」

「…はあ…はい…」

羽根に導かれた子供は緊張の手付きで茶を入れようとして、茶葉を思いきりぶちまけてしまう。慌てて奥に立てかけられていた箒を引っ張り、ガラクタを倒して賑やかな音を立てた。

「シリィより面白いな…」

何かの柄が棚の上に伏せられていた石板を引っ掛けて落とす。子供は寸でそれを受け止め、何でか目を奪われた。埃だ

らけの表面を拭くと、美しい翡翠色が現れる。

「ああ、それは…」

七年前、毎朝眺めては肩を落とした、ユーフィの石板。ノスリが受け取って戻そうとして、表情が止まった。

「……!!!」

息を止めて何も言わず、ノスリは外へ駆け出した。

「親父?」

ビックリして立ちすくんでいる子供の手から石板を取り上げたホルズも息を飲む。子供も好奇心一杯に覗き込むが、すぐに怪訝(げげん)な顔になった。

「……??? ノスリ長さま、どうしたんです? これで何か分かるんですか?」

「ああ…、親父には分かるんだろうな…」

ホルズは、馬繋ぎ場から一直線にハイマツの丘へ飛びノスリを窓から眺め、もう一度石板に目を落とした。

見覚えのある癖字……。

—— ひ・さ・し・ぶ・り ——

「……怒ってる……?」

「……俺も、お前がいないと、困るんだ…」

くおまけ・2く

風露の里に二胡の音が流れる。珍しく霧のない澄んだ夜で、蒼い月の光に音色が絡まるようだ。

「僕の父が初めて母に聴かせたのが、この曲だったらしいです。老師殿に合格点を貰って、その足で山に飛んだって…」

蒼の妖精は長い髪を揺らして、弓弦を降ろした。

「そう…、お母上、嬉しかったでしょうね。ナーガ様も、短期間でとても上達されました」

風露の娘は正面で柔らかに微笑んだ。

「僕はもう、合格点ですか？」

「えっ？」

「この曲、合格ですか？」

「え…、そうですね…まあ…」

そうしたら、もう二胡のレッスンは来てくれなくなるのかしら…。フウリは前髪を睫毛に掛けて、ちょっと俯うつむいた。そんなフウリの表情に気付かない風に、ナーガは蒼い月を見上げた。

「それで、曲を弾き終えた父は、母に言ったんです」

「…はっ？」

「貴方は、この蒼い月のように、どこに居ても、その明るい光

で僕を照らして下さいますか？」

「……………」

「貴方は、貴方の生きる場所で、僕と肩を並べて人生を歩んで下さる」

「……………」

遠くおにツタを滑って交代に来ていた番人と、それ以前に夜食を持って来ていたフウヤが、外の窓の下で並んで座り込んでいる。

「遠回し過ぎる…」

「鈍いお姉ちゃんでも、ギリ、分かるだろ」

再び始まった重奏を聞きながら、番人の青年はふっとフウヤに聞いた。

「あの羽根の男の子、遠くへ行っちゃったんだって？」

「うん、そうだって」

「そうか、それでか…」

「……」

「あの『本音人形』のカケラ、今はナーガ殿の二胡の立ち駒に使われている。やっぱりまだ魔法効果がちょっぴり残っていたんじゃないか？ 遠回しでも何でも、奥手の方が、やっとくせ言えたんだ」

「……………」

「置き土産だったのかもしれないねえ」

狭い谷間の帯状の空に糠星（ぬかほし）が広がり、まるで天の川のようにだ。作業の手を休めて外の椅子で天河を眺めていたラウ老師の耳に、毎週の上達を楽しみにしている二胡奏が聞こえて来た。

「彼女、山を降りないんだ。理由は分かんない。でも大した事じゃない。僕のこの想いと比べたら、全然大した事じゃない」  
くつきりした目の若者がそんな言葉をこぼしながら馬頭琴を習いに通っていた頃は、若気の突っ走りだのう…と、呆れて話し半分に聞き流していた。

二胡の音はいつしか重なり、二つの音色が谷の塔の間を寄り添うように流れる。

「貴方の子息殿も、ようやく頭にくっ付いていた殻が取れましてたかのう。良き奏（かなで）じま……」

音色は心を繋ぎ、時を紡ぎ、未来（さき）の星（ほし）にも流れる。

〜おしま〜